
戯れる蝶

藍原柚希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戯れる蝶

【Nコード】

N2302BA

【作者名】

藍原柚希

【あらすじ】

町と海を隔てる巨大な『壁』がある町で育った少年。彼は、毎日その『壁』に上り、夕焼けを見るのを日課としていた。しかしある日、少年は『壁』の上で、黒髪をなびかせた少女に出会う。その瞬間から、少年の非日常は、始まった――。

行き当たりばったりで書いた処女作です。異世界に少年が連れられていかれます。途中でヒロイン視点が入ります。文章やストーリーに稚拙なところがあると思いますが、ご了承ください。

第一話

僕の住んでいる街には、高い壁がある。僕が住んでいる街は、海沿いの町なんだけど、まるで町と海を隔てるように、コンクリートでできた『壁』がそびえたっているのだ。

といつても、防波堤じゃない。その『壁』は幅百メートルほどで、まるで壊されたベルリンの壁のように両端がスパツと途切れている。毎日夕方になると、夕日の光を『壁』が遮り、町に長い影を落とす。明らかに邪魔だから、誰か町民や組合の人たちが取り壊し運動でもしそうなものだけど、親に聞いた限り、そのような話はないそうだ。ずっと昔、ある日突然できたといわれているけど、僕は信じない。

さて、この『壁』が、僕のお気に入り場所である。正確に言えば、『壁』の上だ。巨人が建てた間仕切りのようなこの『壁』には、鉄製の梯子がついている。僕は放課後、学校が終わるとこの梯子を上るのがほぼ日課となっている。

理由は、『壁』の上から見える景色だ。

高いビルも、電柱なんかもないまっさらなキャンパスの中に、ただ夕日がゆつくりと沈むさまが描かれるのである。僕はそれを、夕日の光が完全に消えてなくなるまで、じっと見つめる。

『壁』の厚さは、三、四メートルほどで、転落防止用の柵も何もない。正直に言うとかかなり危険なのだが、それでも僕は毎日来ずにはいられない。母親がこの事実を知ったら、卒倒するだろう。こんなところに登ろうとする奴なんか、後にも先にも僕くらいだろう。

——そう、思っていた。

その日は、散々な一日だった。どのくらい散々だったかというところ、まず、一時間目に帰ってきた期末テストの赤点にやられ、次に、昼休みの弁当が日の丸弁当で（これには昨夜の夫婦げんかが影響したものともみられる）、そして放課後には親友に掃除当番を押し付けら

れた（「悪い、今日デートなんだ」）。

おかげで、僕がいつものように『壁』についたのは、空が真っ赤な夕焼けに染まったところだった。自転車を梯子のすぐそばに止め、早速『壁』を登りにかかる。手を伸ばして鉄の棒をつかみ、体を引き上げる。そして次の段に足をかける。

登り切ったところには、息が上がっていた。卓球のピンポン玉のような太陽が、今まさに目の前で沈もうとしている。

「ん？」

僕は違和感を抱き、夕日から目をそらした。視界にオレンジ色のまっすぐな地面が入る。それはいつものことだ。イレギュラーなのは――

僕がいる場所から数十メートル離れたところに、誰かがいたことだった。

「……」

僕は考えた。僕は中学生のころから、『壁』に上ることを日課としてきた。今年で、三年目にあたる。これまで、幸か不幸か、友達に知られて不審がられることも、また、大人に見つかって怒られることもなかった。そんな歴史の中で、『壁』の上で人に会うなんてことは、僕にとって黒船来航のようなものである。

声をかけるべきか否か。

こんなところにわざわざ来るくらいだから、奇人変人のたぐいである可能性も否定できない。いや、僕は例外としてさ。

そんなことをつらつらと考えているうちに、相手のほうがこっちに気付いたらしい。夕闇の中を、こちらに向かって歩いてくる。

「くんばんは」

目の前に立っているのは、小柄な少女だった。長い黒髪を垂らし、服も真っ黒だ。まるで喪服だな。

「くんばんは。君、何してるの？」

「あなたこそ、何しにここに来たの？」

質問に質問で返される。

「何って、夕日を見に来たんだよ。ここは僕のお気に入りなんだ」
「ふーん。まあ、ここ、眺めいいものね」

そういうと少女は夕日のほうにちらりと目をやった。もう半分沈みかかっている。

「でも、ここ危ないから登らないほうがいいと思うけど」

「君だって登っているじゃないか」

そこで少女は、僕のほうに向きなおり、にっこりと笑って言った。

「私は、約束だから」

「は？」

「もう、帰るわ。あなた、名前は？」

「……河野良介」

「良介君か。私は、ミカ。じゃあね」

そういうと、彼女はすたすたと梯子のほうへ歩いていく。馬鹿みたいに突っ立って見送る僕。

ひらりと彼女の姿が見えなくなった後で、そういえばあの服装は魔女みたいでもあったなと思った時には、もうあたりは完全に闇に包まれていた。

ミカという侵入者に出会った後も、僕は毎日『壁』に通い続けた。長い梯子を上ると当然のように彼女はいて、『壁』のふちに腰掛け、足をぶらぶらさせていた。

「高校どこ？」

これは、僕がミカに聞いた当たり障りのない質問のはずだった。

「通ってないわ」

ミカは平然と言った。さらに続ける。

「ちなみに働いてもないし」

「じゃあ……二ート？」

「そうなるわね」

ミカは夕日を見たままだ。道理で、いつも僕より先に『壁』に来

ていると思った。

「毎日何してるの？」

「テレビ見たり、本読んだり、ネット見たり」

つまり暇なんだな。ちなみに、ミカは今日も真っ黒なワンピースだった。夏休みも迫った今日、見ているだけで暑苦しい。

「あなたは丁高校でしょ？」

「うん」

僕が通っているのは、頭がいいとは言えないし、かといって特段悪いってわけでもない、言ってしまうえば平凡な県立高校だった。

「学生生活はどう？」

「どうって言ってもなあ……」

この間は学校のパソコンを誰かがクラッシュさせたとして、少し騒ぎになったり、昨日は親友の田中がクラスで最低点を記録したりしたけど、それ以外にこれといって目立ったこともない。野球部は甲子園出場を見事に逃していたし。

「平凡だよ」

この一言に尽きる。

「いいじゃない、平凡」

ミカは特に関心のない様子で言った。

僕は以前はぐらかされた質問をもう一度ぶつけてみた。

「ねえ、なんでミカは、ここに来ているの？」

「前にも言っただじゃない、約束だって」

「だから、何の約束？」

ミカは、僕のほうを向いていった。

「ここで待っていればね」

そして、ミカはなぜか言葉をためた。

「お父さんに、会えるのよ」

「はあ？ 君のお父さん、漁師？」

するとミカは、くすくす笑って、

「そのようなものよ」

と言った。

「さ、帰りましょ」

あたりはすでに真っ暗だった。

高校生活で二回目の、夏休みがやってきた。夏休みが来ても、僕は相変わらず毎日『壁』に通っていた。変わったのは、制服から私服になったことぐらいだ。

ミカは、世間が夏休みになろうが冬休みになろうが関係ない、と言わんばかりに、カラスの濡れ羽色をしたワンピースを着ていた。

さて、今日、僕には気が重いことがあった。ミカは、そんな僕の様子に気づいたのか聞いてきた。

「なんか今日の良介君、ピクニックの前日に雨が降るのか降らないのか心配している子どもみたいな顔してるよ」

僕は少し言いよどんで、

「……あのさ」

「うん」

「今度町内会の祭りがあるのは知ってる？」

「ええ」

「一緒に行かない？」

ミカの顔が、固まった。

「……それって、デートに誘ってる？」

「言っなっ、恥ずかしいから！」

僕は頭を抱えた。

すると、ミカの笑い声が聞こえてきた。

「いいわよ」

約束したのは、午後七時だった。待ち合わせにはいささか遅い気がするが、ミカは『壁』で夕日を見送ってから来るという。僕は、今日は行かなかった。何となく、普通に待ち合わせをしたかったのだ。今日くらいは。

祭り会場の近くのコンビニで僕は待った。そして目の前に現れたのは、もしかしたら浴衣かもという僕の予想を裏切って、闇に溶けるような真黒なワンピースを着た、ミカだった。考えたら浴衣である壁に登るのは無理か。

「待った？」

「十分ほど」

そう、十分、とミカは意味もなく繰り返し、僕のほうを向いて言った。

「じゃ、行きましょ」

祭りの会場は、なかなか盛況だった。ただ、町内会の祭りなので規模が小さいのが残念なところだ。

「何か食べたいものある？」

僕はミカに聞いた。

「うーんと、綿菓子」

僕らは綿菓子屋へ向かった。

と、思わぬ奴らに出会ってしまった。

「おう、なんだ、河野じゃん」

目の前にいたのは、田中と、クラスの一味三人だった。僕は平静を装って言う。

「なに、男四人で祭り？」

「うっせーな。お前こそ誰だよその娘。彼女がいたなんて初耳だぞ」

「彼女じゃないよ。ただの友達。ミカっていうんだ。ミカ、こっちは学校の友達」

「ミカちゃんかー。すっげーかわいいじゃん」

田中の隣にいた有野が言った。飲んでねえかコイツ。

僕は、田中に目くばせした。田中は正確に僕のことをくんでくれたようで、

「まあ、若い二人の邪魔をするのは、男の風上にも置けねえな。というわけで、俺らは適当に店冷かして帰るからよ、二人ともよろし

くやつてくれ」

田中は、

「ミカちゃん、今度メアド教えてねー」

と未練がましく言う有野を引きずり、その場を立ち去ってくれた。そういえばミカは携帯を持っているのだろうか。

「面白い人たちね」

とミカは微笑みながら言った。

「そうだな」

面白いには違いない。

「じゃあ、綿菓子屋、行こうか？」

結局、ミカは綿菓子、たこ焼き、リンゴ飴、チョコバナナを食べた。

「……食べすぎじゃない？」

「だって、目に入るたびに食べたくなっちゃって」

太ったミカなんて、想像したくない。ミカは金魚すくいで獲った金魚を嬉しそうにつつき、

「ふふ、かわいい」

と言った。

そうして、なんだかミカの食べる顔ばかりが目に見え付いた夏祭りは終わった。クラスの人らには街で会った時に冷やかされたが、うらやましがられることが多かった。

「だって、スゲー美人なんだろう？」

そうかな。

さすがに毎日会々と話題はあまりなく、夏休みの間中、僕とミカは『壁』の上では黙って夕日を眺めているような感じだった。僕はミカが隣にいればそれで十分だったし、ミカもそうだったと思う。

その日も、夏の暑い中、僕とミカは『壁』の上で夕日を見送って

いた。

と、ミカが、突然、口を開いた。

「ねえ、良介君」

「何？」

「私、実はこの町からいなくなっちゃうんだ」

「……引越し？」

僕の心臓が早鐘を打ち始めた。

「うん、そんなものかな」

「メールするよ」

ミカが首を振った。

「ううん、駄目なの」

ぽつりとつぶやいた。

「メールも届かない」

「海外？」

「ううん、もつと遠いところ。たぶん二度と会えない」

いったいどこに行くつもりなんだろう。ミカは僕の目をまっすぐ見つめていった。

「良介君、私と一緒に来てくれる？」

そして、夕日のほうを指差した。

「お父さんが来たの」

最初は夕日の中の小さな黒い点にしか見えなかった。しばらく見ていると、それが翼をもつて羽ばたいているものと分かった。どんどんこっちに近づいてくる。

「どうする？良介君」

僕は目の前のものにくぎ付けになっている。そんな、まさか。僕は幻を見ているのだろうか。

赤い鱗、大きな角、コウモリに似た翼。そんなゲームの中でしか見たことのないような生物が、こちらに向かって近づいてきていた。どこからどう見ても――

ドラゴンだ。

「一緒に来てくれるなら、手を握って。そうしたら、お父さんは一緒に連れてってくれるわ」

そう言ってミカは、こちらに手を差し伸べる。

どうする？ 僕。ミカは、これからありえないところへ旅立とうとしている。

僕の頭の中には、親友の顔やクラスの仲間、両親の顔が駆け巡った。そして、最後に――ミカの笑顔。

僕は、ミカの、白くて小さな手を握りしめた。ミカは泣き笑いのような顔で、微笑んだ。

「ありがとう、良介君」

そして、二人で、迫りくる巨大な影に向き合った。大きい。二階建ての家くらいはある生き物が近づいてくる。もう目の前だ。僕は目をつぶった。

思いがけない優しい手つきで、僕は地面からすくい上げられた。目を開けると、町のはるか上空を、僕たちはドラゴンの手の上に乗せられて飛んでいた。

こうして、僕たちは今までの世界からさらわれた。

第二話

ずっと飛び続けていたドラゴンが、下降し始めた。僕の体は冷たくて強い風でガチガチになっていたけれど、ミカの手は握りしめたままだった。

やがて、険しい岩山が見えてきた。ドラゴンは、その岩山の、かろうじて平坦になっているところに着陸した。

僕は、ドラゴンの手から飛び降りた。揺れない地面に、ほっとした。

ミカが後に続く。

僕は改めてドラゴンを見た。間近で見えて目を引くのは、光沢のある堅そうな鱗だった。天然の鎧だ。

「ミカ、このドラゴンが、君の父親って、どうゆうこと？ それにここ、どこ？」

「まず、ここがどこか説明するわね」

ミカが、岩山の下のほうに広がる森のほうに腕を広げた。

「ここは、サルバタ王国。地球上のどこにも存在しないはずの国よ」「地球上のどこにも存在しないはずの国？」

僕は繰り返した。

「そう。そしてこの国では、あらゆる理屈が通用しないわ」

「それってどうゆう——」

意味、と僕は続けようとして、言葉を飲み込んだ。ミカの指先には、火がともっていた。

「ミカ、それ、どういう手品？」

「手品じゃないわ」

ミカは指先の火を吹き消していった。

「この国には、魔法があるの」

——魔法？

「ミカ、ゲームのやりすぎだよ」

「失礼ね。今、やって見せたじゃない。それに、ドラゴンに乗ってこの国に来たのはどこの誰よ」

ミカは口をとがらせた。

「ミカ、もしかして飛べる？」

僕は冗談のつもりで言った。

「飛べるわ。今はやらないけど」

僕はミカをまじまじと見た。真っ黒な服装。まさに魔女だ。

「で、お父さんのことだけど」

とミカは、ドラゴンのほうを向いていった。

真っ赤で大きなドラゴンは、今は犬で言う「ふせ」の体勢で休んでいる。

「ある強力な魔法使いに呪いをかけられて、この姿になったの。それ以来、ずっと隠れて暮らしてるの」

「ミカは、この国の生まれなの？」

「そう。でも、お父さんが呪いをかけられたときに、私は『外界』

——私たちが元いたところね——に逃がされたの。『私が十七になったら必ず迎えに来るから』って言われてね」

それでミカは、毎日『壁』に上っていたのか。父親の別れの言葉を信じて……

その時、僕のおながが鳴った。そういえば、晩御飯も、朝ごはんも、食べていない。あれ？ でも、一晩中飛んでいたような記憶はなかった。『外界』と王国とでは、時間の流れも違うのだろうか。

「おながすいたね。下で何か探そうか」

ミカが森を指差して言った。

「ねえ、ミカ」

「なに」

「魔法が使えるんだったら、何か食べ物出せないの？」

ミカはにっこり笑って言った。

「魔法はそうゆうのじゃないの。それこそゲームのやりすぎよ」

そして、僕の手を取ると、崖から飛び出した。

「わわっ！」

僕はあわてたけど、その必要はなかった。僕たちは、ゆっくりと森に向かって下降していく。

——すごい……

ミカは他にどんな魔法が使えるんだろう。

森には、見たこともない形をしたピンク色の果物が、たくさん実っていた。ミカは一つちぎって皮をむくと、においを嗅いだ後、がぶりと食べた。

「んんっ！ おいしい！ 食べてみてよ、良介君！」

僕も一つちぎって食べた。今まで食べたことのない味だったけど、確かにおいしかった。

両腕に抱えきれないほどの果物を持たされて、僕はミカと一緒にドラゴンのところに戻った。

「お父さん、疲れて眠っちゃったみたい」

確かにドラゴンは、ゴウ、ゴウ、と寝息を立てていた。

「じゃっ、食べよっか！」

ミカは僕の抱えた果物の山から、ひとつを手にとった。

結局、ミカはリング大ほどもある果物を、六つも食べた。それでよく太らないな。

「新陳代謝がいいの」

それにしても食べ過ぎだって。

僕は三つで満腹になった。

「ここはこの国のどのあたりになるのかな」

森の向こうの遠くに、町らしきところが見えた。

「ここは、サルバタ王国の、西の端ね」

ミカが、地面に木の棒で地図を描いてくれた。三角フラッグのよな形だった。

「ここが、私たちが今いるところ」

と、ミカが、棒で三角の左隅を指す。そして、三角の真ん中らへんに、バツ印を描いた。

「で、ここが、首都タルメニア。大きな都市よ」

と、突然、声が割り込んできた。

「おい貴様たち！　そこで何をしている！」

驚いて声のするほうを振り向くと、五人の鎧を付けた兵士がいた。
「何って……ピクニックです」

とミカが言った。兵士の一人が叫んだ。

「ふざけるな！　そのドラゴンはなんだ！」

「このドラゴンは私のものです」

とミカが言った。

「ドラゴンの飼育は、ドラゴン規制法に重大に違反することになる！　よって、貴様らを、直ちにラノミールへ連行する！」

「起きて！」

とミカがドラゴンに叫んだ。ドラゴンは起きると、大きな雄たけびを上げた。

僕はとつさに耳をふさぐ。

「逃げるよ！」

ミカに手を取られ、僕はドラゴンのほうへ向かった。

「止まれ！」

剣を持った兵士が追ってくる。

と、ドラゴンが、がくりと倒れた。

「お父さん！？　どうしたの、お父さん！」

「ドラゴンに乗って逃げようとしてもそうはいかんぞ」

と、兵士の中の一人が言った。

「縛り上げる！」

たちまち、僕たちは、縄でぐるぐる巻きにされてしまった。そして、兵士五人に囲まれる。

「戻るぞ」

と兵士の一人が言った。僕たちの目の前に光の輪が現れた。輪の中

の景色は、その部分だけ切り取られたように、違っていた。僕たちは追い立てられるように、輪の中を通らされた。

「お父さん！ お父さん！」

ミカは何度も叫んだが、ドラゴンは倒れたままだった。

第三話

僕とミカは、別々の地下牢に入れられた。暗くてじめじめとしていた。昼食には、硬いパンと水が出された。

「どうしよう……」

まさか、異世界に来てそうそう、捕まるなんて。ドラゴン規制法とか言ってたな。ということは、この国ではドラゴンは違法なのか。ミカは無事だろうか。

うじうじと考え事をして、夜が来た。

硬い地面で、なかなか寝付けなかったけど、やっととうとうと始めたころ、僕はガチャリという音で目が覚めた。

起き上がると、ミカが、僕の部屋の中に入ってくるのが月明かりで見えた。

「ミ……」

シート、とミカは口到人差し指を当て、

「逃げるよ、良介君」

と小声で言った。

抜き足差し足で外に出ると、ミカは僕の手を握ったままふわりと浮きあがり、刑務所の壁を超えると、少し離れた野原に軟着陸した。ふーっ、とミカが息を吐いた。

「ここまでくれば、ひとまず安心だね。しばらくしたら、また飛んで、離れた町に行きましょう」

「ねえ……ミカ。どうやって牢を出たの？」

「魔法で力ギを盗んで」

とミカは言った。

「私が魔法使いだったのがバレてなくてよかったわね」

じゃなかったら、絶対出られなかったはずだから、とミカは続けた。

「このまま君のお父さんの所に戻るの？」

と僕は聞いた。ミカは首を振りながら、

「それは無理。ここ、ラノミールはね、朝説明した、首都のすぐ横にある刑務所なの。今の私じゃ、お父さんのもとへは簡単には戻れない。遠すぎるもの」

「じゃあ、どうするの？」

「さっきも言ったとおり、もう少ししたら、もつと離れた町まで飛ぶの。きっと朝になったら、脱走がバレて、大騒ぎになるから」

「そしてどうするの？」

「仕事を探さなきゃ」

とミカは、現実的なことを言った。

じゃあ、行こうか、と、ミカは再び僕の手を握り、ふわりと浮きあがった。僕の足も地面から離れる。

しばらく、月明かりだけが頼りの闇の中を、スーッとすべるように進んだ。

時々、あくびが出た。ろくに眠っていないからである。僕たちは、休憩をはさみながら、まっすぐに飛び続けた。

飛び続けているうちに、だんだんと、左の空が明るくなってきた。

「もう、いいかしら」

とミカがつぶやいた。

近くの野原に着地した。

すると、ミカは地面にぐったりと横になった。

「ミカ!？」

僕は驚いてミカを揺さぶる。ミカは声を出すこともつらそうに、

「大丈夫よ、良介君……ただ、私こんなに長く魔法を使ったことなかったから……」

少し眠るね、と言いついて、ミカは目を閉じた。

僕も、正直、眠かった。

でも、二人して眠るには、ここはあまりにも不用心だ。ということ、僕はミカの横に座って、寝ずの番をすることにした。

……はずだった。

気が付くと、僕はあぐらをかいて腕を組んだ格好のまま、寝ていた。日は高く昇っている。僕は何も無い野原を見て啞然とした。

ミカがいない。

「ミカー！ ミカー！」

僕は叫びながらあたりを見回した。人っ子一人いない。何てことだ。さらわれたんだろうか？

僕が途方に暮れていると、

「良介くん」

と、聞きなれた声がして、僕は上を見上げた。

真っ青な空を背景にして、ミカが空を飛んでいた。何かを両腕に抱えている。ミカは僕の前に着地していった。

「見て！ この果物！ すっごくおいしそうでしょう！ 近くの森で見つけたの！」

そうして、自分の両腕に抱えた真っ赤な果物を僕に見せる。しかし、僕は聞いていなかった。

「……ミカ、どうして、僕に何も言わなかったの？」

僕は怒っていた。これ以上ないくらいに。

「え、だって、良介君、眠ってたし……」

「それでも起こして一言言えばよかっただろ！ 僕はミカがさらわれたんじゃないかと思ったんだぞ！」

突然声を荒げた僕を見て、ミカの顔は青ざめた。

「……ごめんね、良介君……心配かけて……」

「いいよ、もう」

僕はミカに背を向けて、座り込んだ。ミカはそんな僕の背中をちよんちよんとつついた。

「……何？」

僕が不機嫌に言うと、

「……食べる？」

手には、自分が取ってきた果物。

「……うん」

食べ物を目の前になると、自分がとても空腹だったことに気付いた。

僕が果物を受け取ると、ミカは安心したように笑った。

「さつき飛んだときに見えたんだけど」

ミカが遠慮がちに言った。果物に伸びる手には依然として遠慮はなかったけど。

「ちよつと歩いたところに、町が見えたの。そこで仕事を探さない？」

「そう簡単に見つかるかなあ」

僕は三つ目の果物をかじりながら言った。味は桃みたいだった。

「なんとかしなきゃ」

と、ミカが五つ目の桃もどきを食べながら言った。

「じゃないと、お父さんの所へ戻れないし、それからお父さんを元に戻すこともできない」

確かに、もう簡単に果物が実っている場所が見つかるとは思えない。

僕がそのことを伝えると、ミカの顔が曇った。上目づかいに僕を見て、

「あのね、良介君、怒らないで聞いてくれる？」

「……内容次第だけど」

「実はね、この果物、盗んできたの」

「はあ？」

「どうしても食べ物が見つからなくて、畑っぱいところがあったから、つい……」

ミカはしょんぼりとしている。

「僕はいいけど……二回目は絶対捕まると思うよ」

「うん、だから、どうしても仕事を見つけないと」

ミカは、六個目を口に入れながら言った。

「うーん、住み込みでねえ……。しかも二人となると……」

豊かなひげを蓄えたおじさんがうなった。おなかが太鼓のように膨れている。

「うちは誰かが泊まるようなスペースないからなあ」

「そうですか……」

ミカが、気落ちした声で言った。

住み込み、二人一緒。これが、僕たちの仕事探しの条件だった。なかなか見つからず、これで五軒目だった。

僕たちは肩を落として店を出た。と、店の店主が、巨体を揺らし、追ってきた。

「おーい、君たち！」

「なんですか？」

ミカが言った。店主はゼゼエ言いながら、

「二人まとめて雇ってもいいという人がいた。住み込み可でだ」

「本当ですか！」

僕たちは声をそろえて叫んだ。

第四話

「いやー、ちょうど、雇つてたもんが三人も辞めてのー」

と白髪で短髪の店主が言つた。御年七十らしい。僕たちが雇われたのは、古びた居酒屋だつた。

「いやー、若いもんが二人も入るのは、こっちとしても助かるんでのー。特にそちらのお嬢さんは美人じゃのー」

と店主はミカを見ていつた。

こうして、僕たちは働き場所を得た。が、居酒屋に入つた途端、

「親父！またホイホイ人を雇つてきて！」

という盛大な怒鳴り声に迎えられた。

「しょうがないじゃろー。お前が三人も辞めさせるんじゃからのー」

「それも親父がろくでもないやつばかり連れてくるからじゃねえか！ 今度もなんだ！ 変な服着た奴ら引き連れて！」

店主の息子は、ギロリと僕たちをにらんできた。僕たちの格好は、『外界』から来て、そのままだったから、この中世ヨーロッパのよ
うな世界の中では、いささか浮いているのかもしれない。通りを歩
いているときも、ジロジロ見られていたし。

「人を見た目で判断するんじゃないよ。この子らは若いし、きっと
一生懸命働いてくれる」

「はい！ 身を粉にして働きます！」

ミカが威勢よく言つた。僕もあわてて、

「頑張ります！」

と言つた。店主の息子は鼻をふん、と鳴らし、

「目いっぱいコキ使ってやるからな。後悔しても知らねえぞ」

と言つた。こうして、僕たちは居酒屋『白魚亭』で働くことが決
まつた。

「……なんか悪いね」

ミカが、ごちゃごちゃと物の置かれた僕の部屋を見ていった。あいているスペースは畳一畳分しかない。ここは、僕が寝泊まりするために与えられた物置部屋だった。ちなみにミカの部屋は、一応ベツドが置いてある、簡素だが清潔そうな部屋だった。

「いいよ。泊まるところがあっただけで十分だし」

僕は肩をすくめて言った。

パリーン！

これは、僕が皿を割った音。すかさず店主の息子——ダグさんというそうだ——の怒号が響く。

「コラア！ 何枚皿割りや気が済むんだ！ 給料減らすぞ！」

「すいません」

僕は頭をぺこぺこ下げながら皿の破片を集めた。

『白魚亭』で僕に与えられた仕事は、雑用係（主に皿洗い）だった。ミカは、ウェイトレスだ。ミカの涼やかな声が、時折店内に響く。

「いらっしやいませー！」

ダグさんの怒号よりも、ミカの声のほうが、店のほうも響かせがいがあるだろう。

まかないは、おいしかった。料理はダグさんが担当していて、パエリアのようなどんぶりや、スパイスの効いたカレーのような煮物など、バラエティに富んでいた。

「いやあ、ミカちゃんがいてくれるおかげで、お店のお客さんが増えたわあ」

というのは、ダグさんの奥さんだ。朝食と夕食は、この人のお世話になっているのだが、これまたおいしい。

「当たり前じゃのー。これだけ美人なんじゃからのー」
と店主が言う。

「そんなことはありません」

とミカが謙遜する。

「まあ、前の三人に比べりゃ、ましだな」とダグさんが言った。

僕はある時、ミカに聞いた。

「ねえ、ミカ、この国には魔法があるし、ミカは魔法使いだね」「うん」

「なのにこれまで、全然魔法を使っている人を見ていんだけど、なんで？」

するとミカが声を潜めて言った。

「この国ではね、魔法を使える人はつかまって、どこかに連れて行かれるのよ」

「ええ？」

と僕は聞き返した。

「だから私は、自分が魔法使いであることを隠してるの。良介君も、私が魔法使いだってこと、他の人に言っちゃ駄目よ」

「うん。わかった」

そして、一か月たった給料日。僕たちは念願の、お金を手に入れた。

「一か月、ご苦労だったのー」

と店主が言い、

「割った皿の分は、引いたからな」

とダグさんが僕に言った。

「はい」

と僕はうなずくしかない。

「どのくらいだった？」

と、ミカが僕の給料袋を覗き込みながら言った。

「このくらい」

僕はミカのベッドの上に中身をひっくり返した。

小さな金貨の小山ができる。

「私は、このくらい」

ミカも僕のまねをする。ミカが作った金色の小山は、心なしか僕のものより大きく見えた。

「どのくらいここで働けばいいんだろう」

と僕が言った。ミカは金貨を手で十枚ずつに分けながら、

「そうだね、三、四か月は働いたほうがいいかも」

と言った。そうしたらお父さんのいるところに行くと何と戻れるかもしれない、と続けた。

「長いなあ」

僕は天井を見上げて言った。

「大丈夫」

とミカは言った。

「きっと」

第五話

そして三か月がたった。

ミカはすっかり『白魚亭』の看板娘となり、僕は簡単な料理なら任せられるようになっていた。

今日も一日仕事を終え、部屋でぐったりと寝ていると、コンコン、とノックの音がした。

「どうぞ」

僕は起き上がりながら言った。ガチャリとドアが開き、姿を見せたのは――

「ミカ？」

「うん、良介君、少し相談があるんだけど、いいかな」
私の部屋で、と続けた。

「手紙？」

僕はテーブルの上に置かれた白い封筒を見ていった。部屋は、ろくそく一本の明かりで、薄暗い。

「うん。お客さんからもらったの。で、その内容がね……」

ミカが封筒の中から便箋を取り出して僕に見せた。それには、
『収穫祭の夜に、噴水の前でお会いしましょう』

ナクバル』

とあった。

「これって……ナンパじゃない？」
と僕が言った。

「ナンパ……だよねえ」

とミカが言った。ちなみに噴水というのは、この町の中心部にある、人気の待ち合わせスポットだ。収穫祭というのは、この町あげての、大きなお祭りだ。屋台はもちろんのこと、パレードなんかも

あるらしい。その収穫祭までは、あと一週間。

「ミカ……できれば、断ってほしいんだけど」

と僕は言った。

「もちろんそうしたいけど……このナクバルって人、お店の常連さんだし……」

と、ミカは困り果てた様子で言った。

その時、僕は妙案をひらめいた。それをミカに伝えたと、

「ええ？」

と驚いた顔をしたが、

「まあ……、それが一番いいよね」

と最後には納得した。

そして収穫祭の夜。僕たちは、噴水の前に立っていた。『白魚亭』も今夜ばかりはお休みだ。

僕が考えた作戦は、あまりにも単純だった。ナクバルって人はミカに会いたいといっている。でも、一対一で、とは書いてない。それなら、僕もついていこう、というものだった。

相手は怒るかもしれないが、そこは納得してもらうしかない。

「やあ、待たせてすみませんね」

と、白い歯を見せて、一人の優男がミカに近づいてきた。コイツか、ナクバルは。

「いいえ、そんなことないです」

とミカが言う。

「こちらは？」

とナクバルが、僕のほうを向いていった。

「どうも、ミカの仕事仲間の、良介です！せっかくの収穫祭ですから、一人より二人、二人より三人ということで、ミカについて来ました！僕たち収穫祭に参加するのは初めてなんで、ナクバルさん、案内してください！」

と、僕はひたすら、空気の読めないお調子者を演じた。

ナクバルはため息をついて、
「まあ、ミカさんに会えるなら、それでいいからね」
と、僕の同行に同意した。

それからのことは、最悪だった。ナクバルは僕を徹底的に無視して、ミカに話しかけ続けた。ミカはミカで緊張しているらしく、ナクバルからおごられた焼き菓子をちまちまと両手で持って食べていた。

そして極彩色のパレードを見た後、僕たちは再び噴水に戻った。

「さよなら、ミカさん」

とナクバルは言った。さらに、

「できれば今度は二人きりで会いたいですね」

と言い残して、ナクバルは去った。

途端に、ミカは噴水のふちに腰を下ろし、

「疲れたあー」

と言った。緊張の糸が切れたらしい。手に持ったままだった焼き菓子の残りをもぐもぐと一気食いした。

「お仕事、お疲れ様」

と、僕は言った。

「ジュースでも買ってこようか？」

と僕が言つと、

「うん、お願い」

とミカが言った。

そのあと、ジュースを買ってミカの元に戻った僕は、ミカをナンパしていたやつらを蹴散らし、ミカの手をつかんだまま、『白魚亭』に帰った。

第六話

「今までありがとうございました」

僕たちは声をそろえていった。目の前には、『白魚亭』店主と、ダグさん、奥さんが並んでいる。

『白魚亭』で働いて四か月がたち、旅の資金のメドがたったので、僕たちは、ここを離れることに決めたのだ。

せめて冬が終わるまではいられないか、と店主に引き留められたのだが、ミカはこれ以上ここにとどまるつもりはないようだった。

「元気でー。体には気を付けるんじゃぞー」

店主が言った。奥さんは、目にハンカチを当てている。ダグさんは、腕を組んで、黙り込んだままだった。

そうして、僕たちは『白魚亭』を後にした。

町を出ようとしたその時、

「待ちたまえ」

と誰かから呼び止められた。

「げっ」

振り向いた僕は、思わず声を出した。そこにいたのは、ナクバルだった。

この一か月間、音沙汰なしで安心してたのに。

「なんですか？」

ミカが用心深く聞いた。

「君たち、これからトラスマスに旅に出るんだろう？」

「はい」

と僕はうなずいた。トラスマスというのは、ミカのお父さんが隠れている山の、一番近くにある町だ。

「私も連れて行ってくれないか」

とナクバルが言った。

「はあ？」

と僕は言った。ナクバルは続けて、

「聞けば、君たちはこの国の地理や文化にまったく疎いそうじゃないか。私が案内しよう。それに、私はこう見えても剣は人並みに扱えるんだ。用心棒にもなるだろう」

とチラリとミ力を見ていった。そういえば、ナクバルの腰には、剣が下げてある。

「どうする、ミ力」

と小声で僕。ミ力は考え込んだ顔で、

「うーん。これから旅するなら、ナクバルさんは必要だと思う。特に普通の旅はね」

と小声で返した。

僕は気になったことを聞いた。

「旅の費用はいくら持ってます？」

ナクバルは背中の背のうから大きな袋を取り出した。僕たちが『白魚亭』で働いた給料の八か月分はありそうだった。

「この通りだ。資金は潤沢であることに越したことはないからね。それと……」

ナクバルは口笛を吹いた。と、どこからともなく、馬車が登場した。

「馬車を手配しておいた。次の町へはこれで行く。次は、メグノスに行こう。これで大分距離を稼げる」

「あの……なんでここまでしてくれるんですか？」

とミ力が聞いた。ナクバルは笑顔で、

「君のためだよ」

と言った。そして僕のほうを見やり、

「一人より二人、二人よりは三人だろう？」

と言った。くそ、何も言い返せない。

こうして、僕たちの仲間が、一人増えた。

第七話

「ところで、君たちがトラスマスに行く理由は何なんだい？」

ガタゴトと揺れる馬車の中で、ナクバルが聞いてきた。

「えーと……」

と僕がうまい理由を思いつけないでいると、

「行方不明の父が、そこにいらしいんです」

とミカがもつともらしい嘘をついた。半分は本当だ。

「そうか」

とナクバルは言った。

馬車の窓をのぞくと、緑の草原がどこまでも広がっている。

「ナクバルさんは、何をしていた人なんですか？」

とミカが聞いた。ナクバルは皮肉な笑みを浮かべて、

「僕は、町長の息子なんだ」

と言った。

「えっ」

と僕とミカ。

「全然、気付かなかった……」

町長の息子が、あんな古びた居酒屋で飲んでていいものだろうか。

「みんな、僕だと気付いた上で無視してくれていたからね」

とナクバルが言った。

「僕は、町長の息子であるということが、とても嫌だったんだ。堅

苦しいことこの上ないしね。おまけに、僕は長男だから、親父の後

を継がなきゃいけないし。この旅に加わったのだって、さっきはミ

カさんのためだなんてカッコつけたけど、半分逃げてきたようなも

のだね」

「じゃあ、旅に出ることは誰にも言っていないんですか？」

と僕が聞くと、

「ああ」

とナクバルは両腕を頭の後ろに組んでいった。

「……帰ってください」

ミカが、ぼつりと言った。

「え？」

僕とナクバルが同時に言った。ミカはなおも続けて、

「帰ってください。いえ、私たちをここで降ろしてください。あなたにこの旅に参加する資格はありません」

「ミカ？」

僕とナクバルはミカが怒っていることに驚いた。

「ミカさん、落ち着いてください。私は何か君の気に障ることを言ったかな」

「言いました」

とミカが言った。

「親の後を継ぐのが嫌だから逃げてきたなんて、そんなふざけた理由の人は私はこの旅に参加させたくありません」

ミカは、今や涙を流していた。

「あなたには、父親も母親もいるんでしょう……？」

ああ。その時になって、僕はミカが怒っている理由を理解した。要するに、ミカは自分がないものを持っているくせに、それを当たり前、むしろ迷惑がっているナクバルに怒ったのだ。この旅は、ミカのお父さんを取り戻す旅なのだから。

ナクバルはそのことを思い出したらしく、

「すまなかったね、ミカさん。私は君の心の内を全く配慮していなかった」

ミカは、ずっと下を向いている。

「でも、君のために何か役に立ちたくて、私はこの旅に参加したんだ。その気持ちは、受け取ってほしい」

「……はい」

ミカは下を向いたまま言った。

そのあとは、みんな終始無言だった。メグノスについて、馬車を

降りたときは、ほっとした。

メグノスは、やたらと水路の多い町だった。

「この町は、『水の都』と呼ばれているんだ」

とナクバルが言った。

「だからあちこちに水路があるし、川がある。まあ、よそ見をして落ちないことだね」

とナクバルは僕を見て言った。もう立ち直ったらしい。

結局、メグノスには一泊しただけで、朝が来てから馬車を借り、町を出発した。

第八話

次についた町は、ダノミという、小さな村だった。

「さあ、ここにいるいる準備しなきゃならないよ」

とナクバルが言った。

「何せ次は、ディアノ山脈を越えなきゃならない。一番低い山を越えるにしても、山中で一泊は覚悟しなければならいだろう」

ディアノ山脈は、サルバタ王国唯一の山脈で、北から南へ、王国の土地を縦断している。トラスマスに行くには、必ず越えなければならないそうだ。

ということで、僕たちは、食料を買いに、店に行った。

民宿のようなところで一泊して、朝を迎えた。主人が、若い男一人と少年少女二人という組み合わせが珍しいらしく、しきりと旅の目的を聞いてきたので、

「観光です」

と答えておいた。

翌日、空は快晴だった。僕たちは水と食料の詰まったりリュックを背負って、クノッグ山——ディアノ山脈で一番低い山——を目指した。

「割と歩きやすそうな道ですね」

僕はクノッグ山の登山道の入り口を見ていった。整備はされていないものの、今まで数えきれない人たちがこの道を通ったのだらう、道はしっかりと踏み固められている。

「ああ、でも、気を付けたほうがいい」

とナクバルが言った。

「村の噂によると、ここでも何人も山賊に襲われているそうだ」

「ええっ」

と僕とミカは言った。

「大丈夫だよ」

とナクバルは不敵な笑みを見せた。

「その時は私が倒すさ」

森の中は明るく、時折小鳥の声が聞こえた。

「なんだかピクニックに来たみたいだなあ」

と僕が言つと、

「そうね」

とミカが言った。

ただ、そう言っていられたのは最初だけで、そのあとは岩山を全身を使って登らなきゃいけなかったり、ボロボロのつり橋を渡らなければならなかったりした。

そうして、空がオレンジ色に染まりだしたころ――

奴らはやってきた。

山の頂上を越えて一息つき、下山を開始してからしばらくして、先頭を歩いていたナクバルが突然立ち止まった。

「ナクバルさん？どうし――」

ミカが言いかけると、ナクバルは、シッ、と自分の唇に指を当てた。

ナクバルはツカツカと最後尾を歩いていた僕の後ろに立つと、

「誰だ、そこにいるのは」

と言った。

「ちっ、バレてたか」

そうして、黄昏時の夕闇の中に、三人の男が出てきた。

「お前たちだな、山賊というのは」

「ああ、そうだよ」

と真ん中に立っている男が言った。右の頬に大きな傷があった。

「本当は寝込みを襲うつもりだったんだが……、まあ、いい。おい、

お前ら、ケガしたくなかったら、有り金全部おいてきな」

「断る」

ナクバルが静かに言った。

「あ？」

傷の男が言った。

「相手をしてやる。来い」

「優男が一人でカッコつけてんじゃねーぞ。おい、やれ！」

「おお！」

両端の二人が、まとめてナクバルに襲いかかる。それぞれ手には、斧とハンマーを持っている。

ハンマーを持った男は横からナクバルに獲物をぶつけようとして、斧を持った方は大上段からナクバルに襲いかかった。

金属同士がぶつかり合う音がした。

何が起こったのかわからなかった。気が付くと、男二人は、ナクバルのそばで倒れこんでいた。みるみる血が広がっていく。

「どうだ？まだやるか？」

余裕のある声でナクバルが言った。傷の男は齒ぎしりし、

「覚えてろっ……！」

というと、森の中へ逃げて行った。

「……いいんですか？追わなくて」

とミカが聞くと、

「いいよ。どうせ雑魚だしね」

とナクバルは剣に付いた血を布でふき取りながら言った。

「さ、いこうか」

山中での一泊は、用心のため、僕とナクバルが交代で見張りになっていた。僕は夕暮れにあったことを思い返していた。

突然現れた山賊、それをあっさり撃退したナクバル。

「いいな……」

僕は口に出して言った。僕も剣を扱えるようになりたい。考えて

みたら、僕はとても無力だった。ミカを守るためにも、力がほしい。

——今度、ナクバルさんに剣を教わってみよう。

僕はそう決意した。ふと空を見上げると、星がきれいだった。

第九話

そのあとは本当に何もなかった。無事に僕らは、下山することができた。しばらく歩くと、ダノミのような、小さな村があった。着いたのは、ちょうど昼時。

「疲れただろう。今日はこの村で一泊しようと思うのだけれど、どうだろう?」

とナクバルが言った。

僕とミカにも、異論はなかった。

午後は、自由時間になった。ミカは部屋で休むといった。相当疲れたらしかった。僕もクタクタだった。でも、しなければならなかったことがあった。

僕は、有り金全てを持って、武器屋へ向かった。

むすっとしたおじさんが

「いらつしやい」

と出迎えた。

「ガキが何の用だ?」

「剣がほしいんです!」

と僕が言った。

「できれば安くて、丈夫なやつを」

ふん、とおじさんは鼻を鳴らした。

「剣を扱うには、まず体を鍛えたほうがいいんだが……。今すぐ欲しいのか?」

「はい、今すぐ」

と僕は言った。

「うーん、じゃあ、コイツだな」

おじさんは奥のほうから、細身の剣を取り出した。

「コイツなら、おまえでも少し慣れれば扱えるだろうし、ソコソコ丈夫だ」

値段も中古だから安くしてやる、とおじさんは続けた。

「持ってみていいですか？」

と僕は聞いた。

「ほらよ」

と、剣を手渡された。確かに軽かった。これなら、僕でも扱えそうだ。

僕は言った。

「いくらですか？」

僕は上機嫌で店を出た。懐は三分の二ほど軽くなってしまったけど、待望の剣を手に入れたのだから。

宿に帰ると、ナクバルは不在だった。僕はベッドに座り、剣を上げしげと見つめた。

柄の部分に、赤い石がはまっている。装飾らしい装飾は、それくらいだった。

「どうしたんだ？その剣」

振り向くと、ナクバルが立っていた。僕がこの剣を買ったことを話すと、

「なんだ、私も連れて行けばよかったのに。参考意見ぐらいはできただろう」

そう言って、僕の剣を取り上げる。

「軽いな……丈夫そうではあるが……しかし細すぎないか……？」

とひとしきりブツブツ言った後、赤い石に目をとめ、しばらくそれを眺めてから、僕に剣を返した。

「まあ、護身用には、ちょうどいいだろう。しかし、今度何か買いたい武器があったら、私に相談してくれ」

相談も何も、この先僕はしばらく無駄なものは買えそうにない。

ナクバルは、また何か用があるのか、外に出ていこうとした。

「あ……、ナクバルさん！」

と僕は呼び止めた。

「時間がある時でいいんで、僕に剣を教えてほしいんですけど……！」

それを聞いたナクバルは、

「ああ、いいとも」

と笑った。

ミカの部屋に行くと、ミカは起きて、本を読んでいた。

「ミカ、本なんか持ってたっけ？」

と僕が聞くと、

「ううん、棚に入れてあったの。結構面白いわよ」

と言った。そして僕が持っている剣を見て、

「それ、ナクバルさんの？」

と言った。僕が説明すると、

「ふーん、確かに良介君に似合っている気がする。それにこの石、きれいな」

と、飾りの石を指差して、言った。

何の石だろ、と僕は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2302ba/>

戯れる蝶

2012年1月13日20時46分発行